

テルの地形と発掘調査区

テル・レヘシュ遺跡は南北が約 350m、東西約 150m の不整形な卵形を呈する遺跡丘である。面積は約 5.0ha を測る。遺跡の両側を川が流れ、周囲には自然の丘陵がそびえ立っている。テルは、「上の町」と「下の町」の 2 段構えになっていて、「上の町」の最頂部には「アクロポリス」として約 80m 四方の平坦な区域が認められる。2006 年に始まった発掘調査では、テルの各所に調査区（A～G 地区）が設定され、前期青銅器時代からローマ時代の約 3,000 年にわたる居住の様相がそれぞれの地区において明らかになりつつある。

A 地区：「上の町」への出入り口が想定される場所に設定した調査区である。発掘調査では「城門」と考えられる遺溝が確認された。時期についてはなお今後の検討を要するが、後期青銅器時代であると考えられる。「城門遺溝」に重なって、上層遺溝（鉄器時代Ⅱ期）と下層遺溝（鉄器時代Ⅰ期）が軸線をややずらして重なり合っている。

B 地区：地表に露出している周壁の年代と構造を探ることを目的として、テルの上段西側の斜面に差し掛かる位置に設けた調査区である。調査の結果、周壁の建造年代は中期青銅器時代Ⅱ期（前 2 千年紀の前半）であることが明らかになった。カナンの都市国家が最も栄えた時代であり、テル・レヘシュが厚い城壁で囲まれた中規模都市国家であったことを物語っている。

C 地区：テル北側の下段テラスに位置する調査区であり、鉄器時代Ⅰ期の建築遺溝から祭儀用器台や土製仮面などの特徴的な遺物が出土したことから、調査区を拡張して調査を進めた。また下段テラスからさらに下の斜面にかけて層位を確認するために試掘をおこなったところ、後期青銅器時代の層位が厚く累々と形成されていることが確認された。



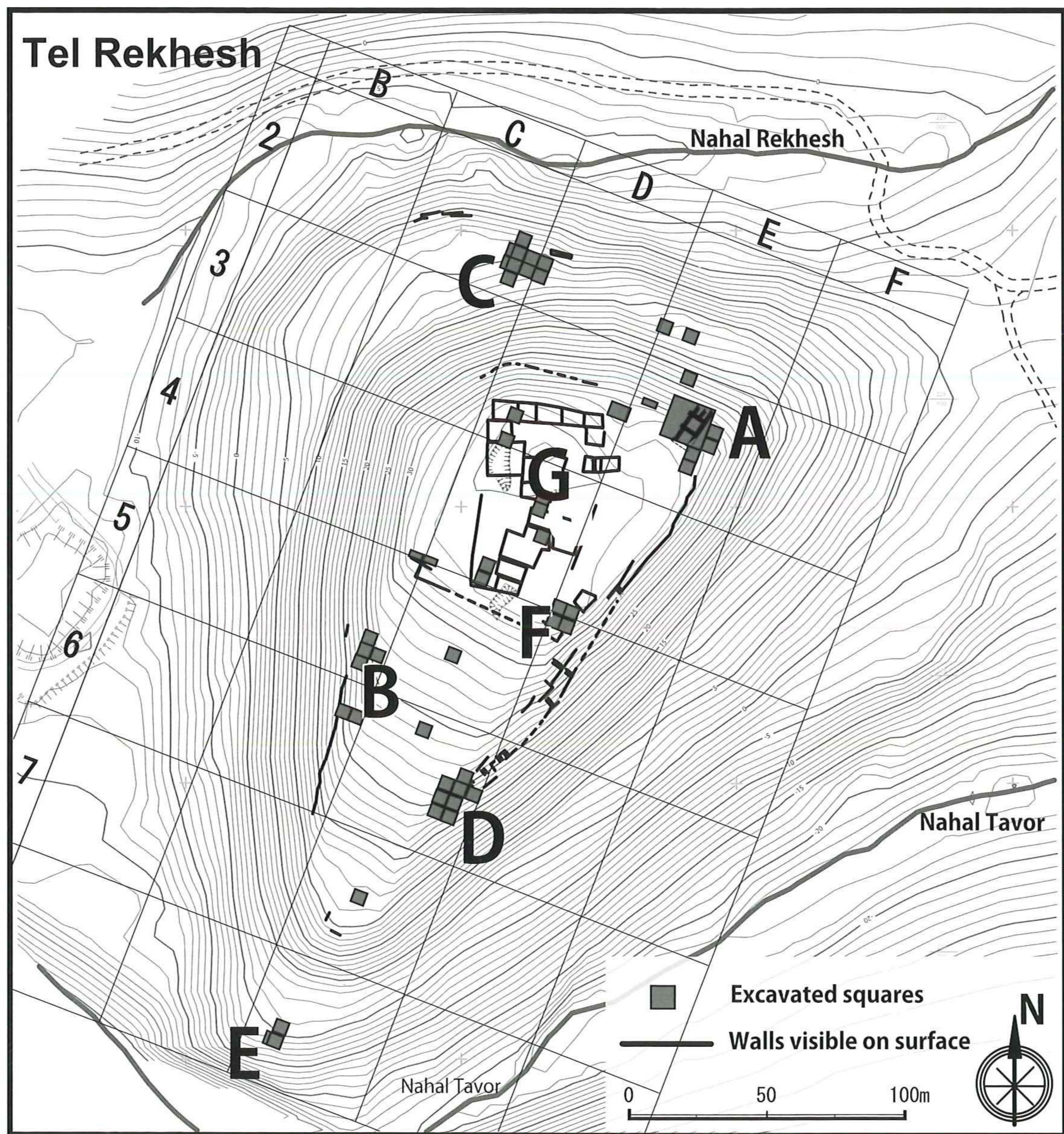
上空から見たテル・レヘシュ

D地区：テル上段南斜面の東側に位置する調査区であり、調査区全体に広がる大形建物（13m × 8m）の築造年代が後期青銅器時代に遡り、前12世紀後半に破壊され焼失したことが明らかになった。建物の内側では、オリーブ油の搾油施設（円筒形遺溝）4基が確認され、下層からは中期青銅器時代の幼児埋葬遺構、前期青銅器時代の石壁の断片が確認されている。

E地区：遺構の広がりや時期を確認することを目的として、テルの最南端の下段テラスに設けた調査区である。鉄器時代I期のオリーブ搾油施設2期のほか、同時期の建築遺構が確認され、鉄器時代初頭における居住が広範にわたっていることが明らかになった。

F地区：テル頂部の平坦面（アクロポリス）の南東隅の様相を探るために設定した調査区であり、ペルシャ時代の大型建物が確認されている。

G地区：アクロポリスの地表面に石組が露出している大型建築遺構（ファームハウス）の性格を探るために試掘調査をおこなった地区である。ローマ時代の建物跡から、石製容器片、色彩壁画断片、コインなどが出土している。



テルの地形と発掘調査区